

岡村昭彦の写真

生きること死ぬことのすべて

2014年7月19日(土)～9月23日(火・祝)

東京都写真美術館

出品リスト

1 ヘリコプターで水田に投入される南ベトナム政府軍兵士たち。南ベトナム、1963年

第1章 戦火の街角で

PANA 通信社と契約した岡村は8カ月かけてタイ、ラオスを回ったあと、1963年7月に南ベトナムの首都サイゴン(現・ホーチミン市)にたどりつく。そこでは南北に分断されたベトナムの統一などを求めてゲリラ戦争が開始されていた。南ベトナムの共産化を阻止しようとするアメリカが支援するカトリックのゴ・ディン・ジェム政権による仏教徒弾圧は激しさを増し、アメリカが派遣した軍事顧問と政府軍が南ベトナム解放民族戦線と戦闘を繰り返していた。前線のない戦争であったベトナム戦争では、首都サイゴンの街角までもが戦場だった。仏教徒や学生らによる反政府デモや反米デモのほか、親米デモ、反共産主義デモまでが入り交じり、解放戦線のテロ活動も日ごとに激しくなっていく。

2 デモを取り締まる南ベトナム警察軍。サイゴン(現・ホーチミン市)、南ベトナム、1964年

3 政府を批判する学生によるデモ。サイゴン、南ベトナム、1964年

4 アメリカに支援されたカトリック教徒の大統領ゴ・ディン・ジェムの政権下では、仏教徒は激しい弾圧にあった。政府の圧力とアメリカの干渉に対して抗議する仏教徒によるデモ。サイゴン、南ベトナム、1963年

5 激しい衝突の絶えないサイゴンでは、住宅に頑丈な鉄扉が備えつけられている。サイゴン、南ベトナム、1964年

6 サイゴンの南ベトナム警察軍兵士。南ベトナム、1964年

7 仏教徒によるデモで、南ベトナム警察が使用した催涙弾による負傷者。サイゴン、南ベトナム、1964年

8 ドン・バン・ミン軍事政権下でも仏教徒は弾圧された。デモを弾圧しようとする兵士を制止する僧侶。サイゴン、南ベトナム、1964年

9 仏教徒への激しい弾圧を繰り返してきたゴ・ディン・ジェム政権がクーデターで倒れ、祝賀デモが行われた。釈尊をたたえる文字をかかげる仏教徒の山車。レ・ロイ通り、サイゴン、南ベトナム、1963年11月

10 ゴ政権崩壊後の祝賀デモ。サイゴン、南ベトナム、1963年11月

11 ゴ政権崩壊後の祝賀デモで台座に上がった仏教指導者たち。サイゴン、南ベトナム、1963年11月

12 ゴ政権崩壊後の祝賀デモで。サイゴン、南ベトナム、1963年11月

13 ドン・バン・ミン軍事政権も1964年1月のクーデターによって倒れ、軍事革命委員会議長に就任したグエン・カン。2月には首相、8月には大統領に就任した。サイゴン、南ベトナム、1964年

14 タンソンニャット空港(サイゴン)の貴賓室でインタビューにこたえるロバート・マクナマラ米国防長官(中央)とヘンリー・カボット・ロッドJr. 駐南ベトナム米大使(右)。サイゴン、南ベトナム、1964年

15 南ベトナム下院議事堂の前を葬儀の車が通り過ぎる。サイゴン、南ベトナム、1964年頃

16 1965年3月30日午前10時50分(現地時間)、アメリカ大使館の脇につけられた車が爆発した。ベトナム人10名以上、アメリカ人2名ほか死亡し、180名以上が負傷した。サイゴン、南ベトナム、1965年

17 爆破テロにあったアメリカ大使館の室内。サイゴン、南ベトナム、1965年

18 爆破テロにあったアメリカ大使館の周辺。サイゴン、南ベトナム、1965年

19 中部山岳地帯のダラットを訪れたラスク米國務長官とグエン・カン首相を歓迎する人々。ダラット、南ベトナム、1964年5月

20 ダラットを訪問したラスク米國務長官を見守る人々。南ベトナム、1964年5月

第2章 戦場へ

岡村は1965年までに40回以上の南ベトナム政府軍への従軍取材を行い、65年には南ベトナム解放民族戦線(NLF)の支配下にある解放区への潜入

取材を試みている。岡村の写真はPANA 通信社を通じて配信されていたが、ほとんど使われず、64年6月12日号の『LIFE』に掲載されるまで全くの無名であった。当時、日本ではベトナム戦争の認知度が低かったことも影響したと思われる。65年4月、岡村は解放戦線中央委員会との接触をはかるが、米軍のスパイと誤解され捕虜となる。捕虜収容所で53日間拘束されるが、43日目にフィン・タン・ファット解放戦線副議長との会見取材に成功する。しかしそれにより5年間の南ベトナム入国禁止処分を受ける。

21 解放戦線側の侵入を防ぐため、周囲を柵で囲って造られた政府軍の拠点となる「戦路村」。南ベトナム、1964年頃

22 「ドサの作戦」とは、中部山岳地帯の解放戦線の拠点とされた地域をヘリコプターからの空爆によって集中的に叩くというものであった。しかしその成果は、政府の宣伝に反して大きいとはいえなかった。クアンガイ省ドサ村、南ベトナム、1964年4月

23 ジングルを切り開いて造った滑走路。南ベトナム、1964年頃

24 米軍の輸送機がジングルの特殊部隊の基地に物資を投下する。解放戦線の対空射撃を避けながらの低空からの補給は非常に危険だ。南ベトナム、1964年頃

25 赤土の中を部隊が進軍する。南ベトナム、1964年頃

26 最前線の司令部に派遣された米軍の軍事顧問は夜遅くまで働いていた。南ベトナム、1964年頃

27 解放戦線の夜襲によって壊滅的な打撃を受けた政府軍基地。南ベトナム、1964年

28 解放戦線の夜襲によって壊滅的な打撃を受けた政府軍基地の内部。南ベトナム、1964年

29 待ち伏せにあって殺された政府軍兵士の遺体。南ベトナム、1964年頃

30 カンボジア国境近くの解放区の農村で、政府軍は穴に隠れていた若い農民を捕らえた。「ベトコン」被疑者であるとして、仰向けに倒して顔に布をかぶせ、その上から水を注ぐ拷問を行った。その水をアヒルが飲む。南ベトナム、1964年5月

31 ひとり捕虜となった解放戦線の兵士は、仲間7人の遺体を検分させられた。南ベトナム、1964年頃

32 逮捕された解放戦線側の一家5人は、指紋を丹念に採られたのち、隠し持っていた武器弾薬とともに公衆の面前に引き出された。その中には0歳の乳児もまじっていたが、射殺されたとみられている。フーコック島、南ベトナム、1963年

33 政府軍陣地を攻撃した解放戦線の「爆弾三勇士」。うち一人は地雷をかかえて死んでいた。彼らは鉄条網にひっかかるような衣服はつけず、ふんどしだけで突入する。南ベトナム、1964年頃

34 米軍のボンチョに包まれた政府軍兵士の遺体。南ベトナム、1964年頃

35 ヘルメットに花を飾っておどける政府軍兵士。南ベトナム、1964年頃

36 配給された食事を手にする政府軍兵士。中部山岳地帯、南ベトナム、1964年頃

37 急ごしらえの食卓で食事を楽しむ政府軍の将校たち。中部山岳地帯、南ベトナム、1964年頃

38 ウェストモーランド米派遣軍司令官が視察に訪れた。警官と兵士が検問をする。南ベトナム、1965年頃

39 政府軍の支配する主要幹線の国道から外れて農村地帯へと入ると、あちこちの村の入り口に、解放戦線の紙の小旗が貼られている。南ベトナム、1965年

40 南ベトナム解放民族戦線の中央委員会との接触を試みた岡村は、「Dゾーン」(サイゴン北方にある解放戦線が支配する危険区域)のジャングルで捕らわれて53日間の捕虜生活を送ったが、43日目に解放戦線副議長フィン・タン・ファットとの会見取材に成功した。ファットは1969年に臨時革命政府の首相となる。南ベトナム、1965年5月

41 解放戦線の直接取材などによって危険人物とされた岡村は、南ベトナム政府から5年間の入国禁止処分を受けた。処分がとけたのち、1971年に南ベトナム政府軍によるラオス侵攻作戦の地上からの従軍取材を試みる。枯葉剤の散布により裸になったジャングルを進み、ベトナムからラオスへ入っていく。中央は、弾薬を空輸する大型ヘリ。ベトナム領内か、1971年2月

42 ラオス侵攻作戦のさなか、M113型装甲車の中で仮眠する若い政府軍兵士。軍用カレンダーの「2月」には入隊する新兵たちの写真。ラオス、1971年2月

43	ラオス侵攻作戦の概要は兵士たちにも伏せられていた。岡村は兵士たちと起居をともし、地上からの従軍取材を敢行してスクープをさらった。ラオス、1971年2月
44	ラオス国境から25キロの地点まで3週間かけてたどり着いた南ベトナム政府軍の部隊は、アメリカ軍のB52による雷のような爆撃を、昼飯を食べながら眺めていた。ラオス、1971年2月
45	国道9号線をホーチミン・ルートの要衝セボンに向かっていた南ベトナム政府軍の装甲車部隊は、25キロ進んだ地点で地雷を踏んで爆発した。衝撃で装甲車からたたき落とされた兵士。ラオス、1971年2月
46	負傷兵をへりに担ぎ込む。ラオス、1971年2月
47	ラオス侵攻作戦とは、解放戦線と北ベトナム軍の退避場所や補給路になっていた隣国のラオスに侵攻することにより、北ベトナム軍をおびき出す作戦であったが、完全に失敗に終わった。戦闘のなか、負傷兵を背負って避難する政府軍兵士。ラオス、1971年2月
48	ラオスを脱出してケサン基地まで引き揚げてきた南ベトナム政府軍兵士たち。南ベトナム、1971年2月

第3章 植民地

ベトナム戦争を取材するかたわら、植民地における戦争の背景をさぐるため、岡村はカンボジアやマレーシア、韓国にまで足を運んでいた。韓国では、雲川の米軍ミサイル基地に立ち入ったとして射殺された韓国人少年の事件を取材し、韓国漁船に乗り込んで李承晩ラインの内側からの取材を試みた。南ベトナムに入国禁止になった後は、ベトナムに派遣される沖縄の米特殊部隊の訓練センターでの様子や、全日空機の羽田沖墜落事故（1966年2月）などを取材する。さらに環太平洋の旧植民地を取材するべくハワイ、タヒチ、ニュージーランド、オーストラリアなども訪れる。「世界史の現場」としての植民地という問題意識は後年まで貫かれており、ここでは、ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）の足跡をたどって訪れた西インド諸島のマルティニク島の写真も取り上げている。

49	しかけられた旧正月の爆竹を見る人々。マカオ、1965年頃
50	アメリカ施政権下にあった沖縄での立法院議員選挙に当選した議員による貼り紙。沖縄、1965年11月
51	アメリカ施政権下にあった沖縄での立法院議員選挙の投票所。沖縄、1965年11月
52	ベトナムに派遣される予定の米特殊部隊の訓練。ポンチョで川辺の草を包んで作った浮袋につかまって川を進むと、「ベトコン」役のアメリカ兵が岸辺を駆け落ちてきた。沖縄、1965年
53	韓国を訪問中のヒューバート・H・ハンフリー米副大統領。韓国、1966年1月
54	米軍のミサイル基地に侵入して射殺された韓国人少年の両親と弟。母親はこの日はじめて少年の埋葬された墓を訪れた。雲川、韓国、1964年2月
55	李承晩ラインの周辺では、日本漁船と韓国漁船との衝突が絶えなかった。岡村は船主を説き伏せて韓国漁船に乗り込み、李ラインの韓国側からの取材を試みた。韓国、1964年3月
56	全日空機羽田沖墜落事故は、乗員・乗客133名全員が死亡する大惨事だった。東京、1966年2月
57	全日空機羽田沖墜落事故。犠牲者の遺族か。東京、1966年2月
58	引き揚げられた犠牲者の遺体が棺桶に入れられて運ばれていく。全日空機羽田沖墜落事故。東京、1966年2月
59	ダイバーが犠牲者を捜索する。全日空機羽田沖墜落事故。東京、1966年2月
60	犠牲者の遺体を収容するための棺桶が山積みになっている。全日空機羽田沖墜落事故。東京、1966年2月
61	フランス領タヒチの海を空から眺める。タヒチ、1966年
62	漁をする人。タヒチ、1966年
63	タヒチを訪問中のシャルル・ド・ゴール仏大統領を見物しようと集まった観客たち。タヒチ、1966年9月
64	タヒチを訪問中のド・ゴール仏大統領。タヒチ、1966年9月
65	タヒチの海に現れたフランスの航空母艦。タヒチ、1966年
66	フランス領のタヒチでは、フランスパンを食べる人が多い。タヒチ、1966年

67	ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）が来日する以前、約2年間を過ごした西インド諸島のマルティニク島で、紺碧の海に飛び込む人。マルティニク島、1972年
68	フランス領であるマルティニク島の公用語はフランス語である。街角の映画のポスター。マルティニク島、1972年

第4章 アメリカを理解するために

1965年5月、サイゴンを脱出した岡村は初めてアメリカへ渡った。53日間の捕虜生活で体を悪くしていた岡村は、カリフォルニアオレンジをホテルの部屋に積み上げては浴びるように食べ続けた。体調が回復するとアメリカ海兵隊が侵攻していたドミニカの内戦を、米軍側と革命軍側の双方から取材する。また山間地ハラバコアに住む日本人移住者も取材している。フランスやスペインの旧植民地で共産主義との戦いを遂行するアメリカ、厳しい少数の反対意見も受容するアメリカを、岡村はさまざまな角度から理解しようと試みていた。ボストンの街やハーバード大学周辺の空撮を行ったり、エドウィン・O・ライシャワー元駐日大使と語り合ったりもしている。ここでは、アイルランド系の作家ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）の足跡をたどって訪れたニューオリンズの写真なども取り上げる。

69	メキシコ、1965年7月
70	ホノルルのダウンタウンを流れるヌウアヌ川のほとり。ハワイ、1966年9月
71	酔いつぶれてパーキングメーターに足をのせ、車のボンネットで眠る人。ハワイ、1966年9月
72	ホノルルのダウンタウンの街角。ハワイ、1966年9月
73	カーマニョ臨時大統領率いる革命軍がサント・ドミンゴの野外スポーツセンターで興行したレスリングの試合。反則すると「ヤンキーみたいなまねをするな!」とやじが飛ぶ。サント・ドミンゴ、ドミニカ共和国、1965年
74	ドミニカ内戦でサント・ドミンゴの街に築かれた物々しいバリケード。米海兵隊の兵士が監視する傍らを、市民が通り過ぎる。サント・ドミンゴ、ドミニカ共和国、1965年
75	監視中の米海兵隊の将兵たち。サント・ドミンゴ、ドミニカ共和国、1965年
76	革命軍の兵士には、敬虔なカトリック教徒が多い。サント・ドミンゴ、ドミニカ共和国、1965年
77	訓練中の革命軍の新兵たち。サント・ドミンゴ、ドミニカ共和国、1965年
78	革命軍の反米ポスター（壁画）。ペンと紙を持つ人を銃剣で突き刺している絵柄には、クーデターによって停止させられた憲法の復活を願う意図がこめられているのだろうか。サント・ドミンゴ、ドミニカ共和国、1965年
79	革命軍の新兵訓練所の職員。サント・ドミンゴ、ドミニカ共和国、1965年
80	革命軍の新兵訓練所での食事の配給。サント・ドミンゴ、ドミニカ共和国、1965年
81	革命軍によって占拠されたサント・ドミンゴの刑務所には、警官や役人が監禁されていた。こっそり刑務所の塔にのぼって撮影した中庭では、受刑者がのんびり過している。サント・ドミンゴ、ドミニカ共和国、1965年

82	鳥の飼料工場の前で。サント・ドミンゴ、ドミニカ共和国、1965年
83	荒廃したサント・ドミンゴ市内。ドミニカ共和国、1965年
84	山間地ハラバコアの日本人コロニアに住む日本人移住者の家族。日本からのドミニカ移民はトルヒーヨ体制の1950年代に始められたが、最大18ヘクタールの優良農地を無償譲渡するなどした日本政府の募集要項は守られず、日系移民は地元民との軋轢を抱えていた。2006年になって日本は正式に謝罪している。ドミニカ共和国、1965年
85	1962年4月に創設された鉄道員組合の建物。創設の前年、31年にわたるトルヒーヨ独裁体制が終結。その後、選挙により選ばれたボッシュ大統領もクーデターで失脚して内乱となり、米海兵隊が投入された。ドミニカ共和国、1965年7月
86	空からみたボストン。マサチューセッツ州、アメリカ合衆国、1968年頃
87	1961年から66年にかけて駐日アメリカ大使であったエドウィン・O・ライシャワーをハーバード大学日本研究所に訪ねる。ケンブリッジ市、アメリカ合衆国、1975年
88	ハーバード・スタジアム（アルストン）でのハーバード大 vs ダートマス大のアメリカンフットボールの試合で。マサチューセッツ州、アメリカ合衆国、1970年代
89	アルストンのハーバード・スタジアムでアメリカンフットボールの試合を観戦する子どもたち。マサチューセッツ州、アメリカ合衆国、1970年代

90	ハーバード・スタジアムでアメリカンフットボールの試合を観戦する。マサチューセッツ州、アメリカ合衆国、1970年代
91	シンシナティ時代のラフカディオ・ハーン（小泉八雲）が住んでいた地区。オハイオ州シンシナティ、アメリカ合衆国、1972年
92	ハーンの足跡を追ってのニューオリンズ取材。どんな国でも岡村はかならず古本屋をのぞいた。ルイジアナ州、アメリカ合衆国、1972年
93	ニューオリンズの街角。ルイジアナ州、アメリカ合衆国、1972年
94	ニューオリンズの街角。ルイジアナ州、アメリカ合衆国、1972年

第5章 ベトナムから遠く離れて

ベトナムで特殊戦争を開始したケネディ米大統領のルーツをたどって、岡村は1968年1月、アイルランドを訪れる。英国の植民地として苦難の歴史を歩んできた北アイルランドではプロテスタント系の親英国派（ユニオニスト）と、南の共和国との統一を願うカトリック系住民（ナショナルリスト）とが鋭く対立し、武装組織IRA（アイルランド共和軍）の活動や公民権運動が激しさを増していた。家族をダブリン郊外に移住させた岡村は、そこを拠点に北アイルランド紛争の取材を行う。また、英国の旧植民地ナイジェリアで起こったビアフラ独立戦争の取材もたびたび行っている。日本からは距離的にも心理的にも遠いアフリカと旧宗主国との関係を理解するべく、植民地の内側に住んで世界史を理解しようと努めるのである。

95	警官隊が催涙弾を撃ち込むと、カトリックの青年たちがぬれた布でそれをおさえつける。ロンドンデリー、北アイルランド、1969年8月12日
96	「ボグサイドの戦い」で、カトリックとプロテスタントが衝突した翌日のフォイル大通り。ロンドンデリー、北アイルランド、1969年8月
97	衝突のなかで催涙弾が発射された。ベルファスト、北アイルランド、1969年頃
98	エリザベス女王の北アイルランド訪問に反対するデモ。この時期、北アイルランドでは議会が停止され、英国による直接統治が行われていた。ベルファスト、北アイルランド、1977年
99	衝突などによって荒廃した町並み。ベルファスト、北アイルランド、1970年代
100	衝突の続くベルファストに、治安維持のためイギリス軍が投入される。2階の窓にアイルランド共和国旗がみえる。フォールズロード、ベルファスト、北アイルランド、1969年頃
101	北アイルランドの国境地帯、クロスマグレンにあったイギリス軍駐屯地。学校の校舎の窓をコンクリートで埋めている。スコットランド兵が並んで記念写真を撮らせてくれた。北アイルランド、1976年
102	ベルファストに投入されたイギリス軍兵士。フォールズロード、ベルファスト、北アイルランド、1969年頃
103	ベルファストのカトリック地区にあるデヴィス通りのイギリス兵。ベルファスト、北アイルランド、1969年頃
104	ベルファストの中心街で爆破事件があった。予告電話と同時に軍隊と警察が全ての建物からドネゴール通りまで退去を命じた。市庁舎の前を去りゆく人々。ベルファスト、北アイルランド、1976年
105	訓練中のIRA（アイルランド共和軍）の兵士たち。北アイルランドないしアイルランド共和国のいずれかで撮影されたものだが、当時、岡村にはこれを発表する意思がなかった。1970年代
106	兵士による検問を通り抜ける女性。北アイルランド、1970年頃
107	パートタイマーの義勇兵として検問所に立つプロテスタントの女の子。北アイルランド、1976年頃
108	北アイルランドの議会庁舎（ストーモント）で支持者に手を振る英国議会議員で牧師のイアン・ベイズリー。胸に「Apprentice Boys of Derry」（ロンドンデリーのオレンジマンの組織であるアプレンティス・ボーイズ）の徽章がみえる。ベルファスト、北アイルランド、1970年
109	カトリックの居住区「ボグサイド」を眺める。ロンドンデリー、北アイルランド、1969年8月
110	ロンドンデリーでは、プロテスタントによるロンドンデリー攻防戦での勝利（1689）を祝うパレードがカトリック居住区を通過することで、両者の衝突が激化した。警官隊がプロテスタント側についた「ボグサイドの戦い」が勃発。ボグサイドを占拠しようとする警官隊と追いつそうとする人々。ロンドンデリー、北アイルランド、1969年8月12日
111	「ボグサイドの戦い」のカトリック側の中心人物のひとり、大学生で英国議会議員のバーナデット・デヴリン。ロンドンデリー、北アイルランド、1969年8月12日

112	ビショップ通りのイギリス兵。ロンドンデリー、北アイルランド、1969年頃
113	「ボグサイドの戦い」での警察隊員（王立アルスター警察隊）たち。ロンドンデリー、北アイルランド、1969年8月
114	ロンドンデリー、北アイルランド、1970年代
115	火炎瓶によって燃やされた荷車の火を消す消防車、「ボグサイドの戦い」で。ロンドンデリー、北アイルランド、1969年8月12日午後4時頃
116	ロンドンデリーのクレガン地区でも、「ボグサイドの戦い」で大きな衝突があった。ロンドンデリー、北アイルランド、1969年8月
117	アイルランドにおけるプロテスタントの歴史的な勝利を祝うパレードのために飾り付けられた町。ロンドンデリー、北アイルランド、1970年代
118	ダブリン発ベルファスト行き急行列車の乗客。白いギブスで固めた左足を前の座席にあげ、フレデリック・フォーサイスの『戦争の犬たち』を読んでいた。北アイルランド、1976年1月
119	緊急用通報電話の番号「999」が書かれた看板。ベルファストか。北アイルランド、1970年代
120	空輸前の救援物資の塩。ダブリンの市民団体によってビアフラ（現・ナイジェリア東部）に向けて発送された救援物資は、いったんギニア湾沖のサントメ島（当時はポルトガル領）に荷揚げされ、今度は救援機でビアフラに空輸された。サントメ島、1968年12月
121	サントメ島からギニア湾を望む。EC（欧州共同体）加盟国のジャーナリストではない岡村は、ここでビアフラへ「入国」するビザをとるため20日間留め置かれた。サントメ島、1968年12月
122	サントメ島で取材するヨーロッパのジャーナリストたち。「クリスマス用」に飢餓のニュースを書いて、ビアフラを見ることもなく帰国したジャーナリストもいたと岡村は書いている。サントメ島、1968年12月
123	サントメ島に荷揚げされ、ビアフラへの空輸を待つ救援物資。サントメ島、1968年12月
124	サントメ島とビアフラを毎日往来している救援機。オンボロの払い下げの飛行機がほとんどだ。サントメ島、1968年
125	サントメ島からビアフラへ向かう救援機のパイロット。ナイジェリア領内に入れば撃ち落とされる危険と隣り合わせの命がけの飛行は、1回あたり18万円程度の高収入になる。サントメ島、1968年
126	到着した救援物資に飛びつく人々。ビアフラ、1969年
127	給食センターで食事を待つ子どもたち。ビアフラの飢餓は、ただ食糧がないという理由だけではない。ナイジェリア軍によって海上からの連絡が封鎖され、塩が届かなくなったための栄養失調と、関連する病気のためである。ビアフラ、1969年
128	先天的に皮膚の色が白い「アルビノ」の子ども。ビアフラ、1969年
129	ビアフラから、救援活動の最大の基地になっているサントメ島の病院に急送される重体の子どもたち。20トン積み的大型米軍機のC97型輸送機に折り重なるように並べられている。ビアフラ、1969年
130	国際赤十字のフランス人医師による手術。ナイジェリア、1970年頃
131	日本赤十字社の医療団による手術。ナイジェリア、1970年頃
132	患者に最後の祈りを捧げる神父。ナイジェリア、1970年頃
133	飢餓に加えて結核とマラリア熱に襲われた子ども。看護婦は頭の静脈に食塩注射をしたが、子どもの命はよみがえらなかった。飢餓状態においては飢えそのものよりも、関連する病気によって死ぬ人が多い。ビアフラ、1969年頃

第6章 惨禍

ビアフラ独立戦争は、カトリック系の多い東部州のイボ族が中心となって1967年5月30日、独立を宣言したことによるナイジェリアの内戦である。イギリスとソ連が支援したナイジェリアと、フランスなどが支援したビアフラとの戦争は2年半ほどで終結し、ビアフラ共和国は崩壊した。68年頃に海岸部を押さえられて食糧や物資の供給が途絶えたビアフラの住民は飢餓に陥り、世界的な注目を集めた。68年12月にビアフラ入りした岡村は、そこで胸を撃ち抜かれて倒れるビアフラ軍の兵士の写真を撮影する。「まるで人間が土にかえる“詩”のようなもの」を感じたと岡村は述懐している。エチオピアには70年と74年に訪れた。山間地ウォロ州では大干ばつにより飢饉が起こっていた。岡村は山深いウォルケイ地区まで徒歩で入り、病気の飢餓民を救出している。極限状況のなかでの人間の命の尊厳に目を向けている写真群である。

134	オウェリ市に突入したビアフラ軍への攻撃指揮をとるナイジェリア軍の将校。オウェリ、ビアフラ、1968年
135	ナイジェリア軍に向かって突撃するビアフラ軍の兵士。ビアフラ、1969年
136	ナイジェリア軍の機関銃に左胸を撃ち抜かれて倒れるビアフラ軍の兵士。ビアフラ、1969年
137	砲弾の炸裂した衝撃などで精神に異常をきたす「シェルショック」になったビアフラ軍の兵士。ホワイトカラーの多いイボ族からなるビアフラ軍の兵士は、十分な訓練も受けな いまま戦争に駆り出されたため、こうした精神障害を被る兵士が非常に多かった。ビア フラ、1969年
138	雨のなかで畑の世話をするランドアーミー、いわゆるビアフラの農耕兵士。農村出身者 は雨期にむけて駆り出され、ジャングルを開墾して畑にし、食糧自給態勢をつくる。ビア フラ、1969年
139	ビアフラでは約100名のアイルランドの神父が布教と救援活動を続けていた。毎週日 曜日の早朝には教会でミサがもたれ、多くの人が告解に訪れ、順番を待つ。ビアフラ、 1969年
140	イモ州オグタ、ナイジェリア、1970年頃
141	ビアフラ戦争では、ソ連がナイジェリア側を積極的に支援した。ミグ戦闘機によって破 壊された車、1969年頃
142	1970年1月、ビアフラの指導者オジュク将軍が亡命してビアフラが崩壊、ナイジェリア 内戦が終わった。3月にソコト川で行われた漁業の終わりを記念する「魚祭り」での風景。 北部ソコト州、ナイジェリア、1970年3月
143	1972年からの異常気象と大干ばつによりエチオピアは飢餓にみまわれていた。救援物 資を積んだローリー。エチオピア、1974年
144	救援物資を積んだヘリを待つ人々。ウォロ州、エチオピア、1974年
145	救援物資を積んだヘリが着陸する。ウォロ州、エチオピア、1974年
146	国際赤十字医療団の女医と子どもたち。ウォロ州、エチオピア、1974年
147	ウォロ州の州都デシーの避難民のためのシェルターで、エチオピアの主食である「イン ジェラ」(パンの一種)が作られている。ウォロ州、エチオピア、1974年
148	ゴビエ町のシェルターから街道をはずれて22キロ進んだ山深いウォルケイ地区では、 飢餓のために人が死に絶え、廃屋が風に鳴っていた。ウォロ州、エチオピア、1974年
149	ウォルケイ地区から30人以上の重病人とともに山を下りていく。乾燥しているはずの山 岳地帯だが、異常気象のため、夜には深い霧がすっぽりと村を包む。しかし雨は降ら ない。水がないのだ。ウォロ州、エチオピア、1974年
150	街道からはずれた道を徒歩で進む。飢餓による死者はこの時点までにエチオピアで30 万人以上に達したと推定されている。ウォロ州、エチオピア、1974年
151	避難民のためのシェルターに現れた親子。ウォロ州、エチオピア、1974年
152	「エチオピア・オーソドックス」と呼ばれる、エチオピア正教の教会に集まる人々。銃を担 いでいるのは民兵であろうか。エチオピア、1974年
153	教会に集まる人々。教会の屋根の上にあるのは装飾的にアレンジされた十字架である。 週末には思い思いに正装をして教会へ出かけていく。エチオピア、1974年

第7章 ホームへ、故郷から遠く離れて

世界中を飛び回っていた岡村にとって、アイルランドは第二のホームだった。しかし静岡・舞阪を拠点としてホスピスやバイオエシックスの思想を広める活動を続けるなど、日本にこざわり続けた側面もある。そんな岡村は、故郷から切り離された人々や故郷を求める人々、故郷を傷つけられた人々や居場所のない人々、故郷を愛する人々に深く温かいまなざしを向けている。戦乱の街角で結婚式をあげるカップル、プロテスタントのお祭りの準備をする家族や青年たち、ウェールズとのラグビーの負け試合をじっと見守るアイルランドの人々……。インドシナに置き去りにされ、記憶喪失となった元日本兵の柿沢健十の帰国運動に加わり、小泉八雲という名で知られるアイルランド系のラフカディオ・ハーンの彷徨の足跡をたどって世界をめぐり、日本河川開発調査会の中国調査に加わって水源開発の問題にも取り組んでいる。戦争、バイオエシックス、ホスピス、水や食べ物の問題、医療の問題など、問題意識は多岐にわたったが、そのまなざしはすべて人間の生きる場所、ホームへと注がれていた。

154	バスで南のアイルランド共和国との国境税関を通過する。北アイルランド、1970年代
-----	--

155	ケリー州のどこかであろうか。アイルランド共和国、1970年代
156	若い漁民。アイルランド共和国、1970年代
157	ダブリンのリフィ川のほとりを、馬車にボンゴツの自動車載せて走る「旅する人々」(トラベラーズ)。かつて「ティンカーズ」という蔑称と呼ばれた彼らは、ブリキ加工や博労をする定住しない人々である。ダブリン、アイルランド共和国、1970年
158	牛市の風景。アイルランド共和国、1970年代
159	牛市の風景。アイルランド共和国、1970年代
160	春の短い期間だけ実をつける野いちごが店頭にあふれる。ウィックロー州、アイルランド共和国、1977年
161	ベルファスト中心街のデパート「ロビンソン&クリーバー」の前にたたずむ少年。ベルファスト、北アイルランド、1970年代
162	裏切り者をかたどった人形を相手に遊ぶ子どもたち。カトリックに対する勝利を祝うプロテスタントのお祭りでの風景。遠くで警官が見つめている。ロンドンデリー、北アイルランド、1970年頃
163	小さな路地の入り口にみえるポットインジャーという名称は、イギリスの最初の香港総督になったアイルランド出身のヘンリー・ポットインジャーからきている。ベルファスト、北アイルランド、1970年代
164	1689年のロンドンデリー包囲戦でのプロテスタントの勝利を祝うお祭り。ロンドンデリー、北アイルランド、1970年代
165	「ロビンソン&クリーバー」の前で。ベルファスト、北アイルランド、1970年代
166	通学中の子どもを警官が誘導する。北アイルランド、1970年代
167	プロテスタントのお祭り。「法王はいらない」という落書きの前にたたずむ少女。ロンドンデリー、北アイルランド、1970年代
168	ベルファストのカトリック地区にある聖ペテロ教会で結婚式をあげる若いカップル。フォールズロード、ベルファスト、北アイルランド、1970年代
169	ロンドンデリー包囲戦でのプロテスタントの勝利を祝うお祭りの日に、家族で飾り付けをするプロテスタントの人々。ロンドンデリー、北アイルランド、1970年代
170	街頭の古着市の風景。ダブリン、アイルランド共和国、1970年代
171	ランズダウンロード・スタジアムではアイルランド vs ウェールズのラグビーの試合が行われていたが、アイルランドのぼろ負けだった。ダブリン、アイルランド共和国、1970年代
172	太平洋戦争終結直後、味方によって置き去りにされインドシナに残された元日本兵の柿沢健十はラオスで抗仏戦に参加したが、フランス軍による激しい拷問により記憶を失った。ラオスのサバナケットにたどり着いたが、言葉を話せず日本人であることもすっかり忘れていた。支援者の運動によって1977年3月、帰国を果たす。東京、1977年
173	晩年の岡村は、ホスピス運動と環境問題に取り組む。最晩年には子どもたちをともなつて、モンゴルを訪れている。モンゴル、1984年
174	日本河川開発調査会による調査で。バスからの光景。中国、1980年頃
175	長江、三峡の川下り。中国、1980年頃
176	日本河川開発調査会による調査で。盧溝橋、中国、1980年頃
177	長江、中国、1980年頃
178	長江、三峡の川下り。中国、1980年頃
179	岡村が住んでいたウィックロー州アヴォカの家、「ホワイトブリッジハウス」の前の道。アイルランド共和国、1970年代
180	日本河川開発調査会による調査で。中国、1980年頃
181	小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)の足跡を追って訪れた松江の城山稲荷神社。島根、1972年頃
182	小泉八雲の足跡を追って訪れた松江の島根原子力発電所(1974年に営業運転開始)。島根、1972年

凡例

- ・ 作品データは作品番号／キャプション／地名／撮影年の順に記載した。
- ・ キャプションについては岡村昭彦が発表したテキストを参考にし、戸田昌子が作成した。
- ・ サイズはイメージサイズでタテ250×ヨコ370(370×250)mmもしくは、タテ284×ヨコ284(図版番号10、11、12、13、19、20、22、29、36、37、53、54、55、71、73) mm である。
- ・ 技法は図版番号1はゼラチン・シルバー・プリント、のこりすべては発色現像方式印画である。
- ・ 作品はすべて東京都写真美術館所蔵である。